

米作日本一の体験

川原 宗市氏 述

一. 私の経営規模

私の町は田，山林半々の土地であるが，私の経営規模を申し上げますと，水田1町5反2畝，畑2反5畝，乳牛7頭，鶏20羽である。家族構成は私と妻，長男の3人である。水田裏作としてレンゲを全部作付し，このほか青刈えんばく及び同エンシレージを作っており，これらが主な自給飼料である。

二. 土中に酸素送込がコツ

私は20年間反当1,000貫程度の堆肥を毎年入れ，米反当4石まではみごとに収穫したが，4石以上はうまくゆかなかった。29年には肥料よりも酸素を土地の中に入れることに力を入れた。つまり水のかけひきに力を入れた。29年，30年と富山県が米作日本一をとったが，これは田干しによって土中に酸素を入れること以外その成果は考えられない。つまりガスをぬいて酸素を土中に入れることである。(米作1位は6石7斗である。)

一般に根腐をおこしていない田は殆んどない。だから稲の根を作ることが収穫をあげることである。太くて，長いしかも丈夫な稲を作ることである。第1年は半分がたおれ，第2年度は3分の1がたおれ，第3年目は酸素を土中へ入れたところたおれなかった。

三. 酸素送込と植付方法

植付後10日位で軽く干した。酸素を入れると根が下部へ移行する。上根がはるのは地表の酸素を吸収するためである。私の田では根が9月までに2尺5寸まで伸びたが，これを刈取時期まで放っておくとこれ以上のびたことと思う。

植付は1尺2寸に4寸の一条並木で坪約79株で

南北に巾を広くし，日光と北風を入れるよう心掛けた。労力は家族3人以外のほか2人の嫁いでいる娘をつかった。植え方は浅植により分ケツを促している。

苗代はアブラガミで35日，ビニールで30日の保温折衷で行い，9日間で田植する関係上，5回にわけて種まきした。昨年までは2本を極浅植にしていたが，今度は3本を植える考えでいる。過去連続3カ年間，同一品種を植えた。

四. 田植後の管理

中耕は深くし，5寸位返えずと温水が下に入り分ケツを促す。縦のみ2回中耕し，2回除草し，最後に手取を1回，予定分ケツになる7月4日に終わった。除草，手取は早くおわらせるのがよい。この頃23本位に分ケツしており，その後の分ケツをとめる手段を行っている培土では分ケツがとまらない。2.4-Dでは一時とまるが，あとから又分ケツする。そこで極端な2日2晩，ついで3日も4日干すというふうに田干しをして分ケツをとめ，それから水を充分に入れる。(昭和29年には8月7日に根腐を防ぐため田干しをしかたなしにした。この頃2回干したのは私としてはよくない方法であった。)

分ケツを23本位になぜするかというと，これはこの頃親穂が130-150粒になり，これ以後のものは20-50多くて60粒で，収量は期待できない。穂をつまんでそろっているものは収量がある。又モミの手ざわりの良し悪しによっても収量が決る。穂のそろっていないものは目方の軽いおくれ穂が多い。

農林一号で200粒以上の大きい穂をつけたが，これで充分完熟すると思う。早期分ケツが必要であり，第一分ケツで殆んどとめてしまうようにする。

岡山畜産便り 1956.06

粒が大きく目方の重い米を作ることであるが、統制がはずれば目方の重いものがうまく、目方で売買されるようになると思う。牛乳においても脂肪買われていると同様、米も澱粉の多い、即ち粒の大きい目方のあるものを作ることである。

五. 尿素の葉面散布の効果

次に肥料の点であるが、堆肥は反当1,000貫のほか尿素の葉面散布による施肥を3ヵ年継続している。開花後施肥すると最後まで葉に力をもたせると米の質がよい。つまり下葉を枯らすと米の収量は減少する。下葉の枯れる原因は株が大き過ぎて光線、風が入らず、又大き過ぎて秋落による二つがあげられるが、追肥として尿素の散布がよいと思う。

尿素を葉面散布したワラは飼料価値もよい。(一番刈、二番刈のあとのトウモロコシに尿素を葉面散布すると飼料価値があると思う。)尿素的葉面散布の量については特に定められた量をあやまらないよう注意が必要で、もしあやまるとかえって害があることがある。

六. メイ虫の防除

パラチオンは村、部落全体の共同防除でなければならない。一斉防除を行えば二化メイ虫の駆除は必要ない。4ヵ年間共同して防除を行った結果、この成績がでた。しかし村境は仕方がない。7-8月にメイ虫により親穂になるものが傷められるから是非この時期の防除が必要である。

七. その他

昨年の豊作で岡山南部で不作であったという原因は、水温があつすぎたため根が傷んだものと考えられる。絶えず冷水をそそいだ田は豊作だったと考える。(富山県井波町出身、昭和29年米作日本一の受賞者、3月13日県農業試験場における講演要旨)